

供養塚古墳発掘史の補記

宮村 誠二

1. はじめに

供養塚古墳は、滋賀県近江八幡市千僧供町に所在する墳丘長約52mの帆立貝式古墳である。当古墳からは、江戸時代の寛文年間と昭和7年度の発掘および昭和57年度に実施された発掘調査において各種の遺物が出土している。

供養塚古墳をはじめ、近在の住蓮坊古墳や岩塚古墳、トギス塚古墳など大小10数基の古墳によって構成される千僧供古墳群は、琵琶湖東岸平野部における古墳時代中期～後期にわたる首長墓系譜の動向を良好に示す古墳群として知られている（辻川2002）。

ところで、筆者は過日、千僧供町自治会が保管する『年代記』なる史料に、昭和7年度に行われた供養塚古墳の発掘に関する記述があることを知った。

この発掘については、柏倉亮吉氏（1905～1995）による調査報告（柏倉1934）と中川泉三氏（1869～1939）による彙報（中川1938）があるほか、中川氏により調査概要文がまとめられている（中川記念展実行委2009）。

一方、『年代記』は、地元住民による記録という点で、外部の研究者による上記の報告文とは一線を画すものである。自治会記録という資料の性格上、遺構・遺物にかかる情報量こそ少ないが、供養塚古墳の発掘に関する貴重な情報源であり、柏倉・中川両氏の報告文と併読することで発掘の事情をより詳細に知ることができる。

2. 『年代記』による「発掘の事情」の補記

柏倉氏は調査報告のなかで、昭和7年度の供養塚古墳「発掘の事情」について、大字千僧供の水谷國松・小川萬助両氏の談として次のように記述している。

「昭和7年末、馬淵村は農村匡救事業として、東方より小学校に到る直通道路を敷設することに決し、その土取り場として偶附近に聳えし盛土の供養塚を着目した。」「発掘は南側より始められ漸次北行したが、昭和8年2月上旬に到つて封土の略中央部より、平石に上下四方を囲まれて、刀剣合計11振、南北に長く横たはり、其上に鉄製の鎧及び小鉄板破片の存するを発見した。之を村当局に通じ、なほ発掘を継続し、基底部の直径40余尺の円形封土を残すに及んで工事の終末を見た。而もこの間当事者自ら中川泉三氏より残部封土の内に石室あらんとの言を得て、更に残部の封土を発掘するに到り、しかもその発掘、封土残部の半に及ぶも遂に一物を見出さず、因て此の部を再び埋め直したといふのである」（柏倉1934）。

それでは、次に『年代記』を見てみよう（写真1）。『年代記』に見られる供養塚古墳の発掘に関する記述は以下の

とおりである。

昭和7年12月 本年政府ニ於テ時局ニ鑑ミ農村救済土木事業ヲ計画セラレ本村ニ於テモ学校前道路拡張工事ヲ村直営トシテ施行スルニ当リ大字千僧供々養塚山ヲ土砂採取場ニ村会ノ決議ヲ経テ縣知事ニ認可申請シ十二月七日起工式及祈祷式ヲ挙行セラル工事監督委員（千僧供区長）列席全二十日工事着手其間工事ノ進捗ニ努力セリ

昭和8年2月14日 供養塚山南西ノ中央部ヨリ古武具（鎧）古刀剣ヲ発掘セリ 直ニ役場ヘ一時保管方依託ス

昭和8年3月18日 先ニ発掘セル古武具、刀剣ノ鑑定及当字古来ノ歴史ヲ鮮明ニスルタメ坂田郡中川泉三氏宅ヲ訪問スベク水谷國松、小川萬助両氏ヲ派遣シ種々研究方ヲ依頼セリ

昭和8年5月5日 午前ヨリ例年ノ通り大辻普請ト云テ岩倉山稲荷社ノ上馬ノ脇ニ土砂汗止ノ行フ後ハ大川箕樋上両川浚ヲ行フ 当日午後三時三十分ヨリ史蹟供養塚第一回追福読経会西来寺内田上人勤行中川泉三氏ノ祭文代読参詣者、饅頭供養分配シ終了

是ヨリ先四月二十二日坂田郡柏原村大字大野木中川泉三氏供養塚古墳の实地視察ヲ乞岩塚渡宜壽塚等ノ实地視察セラレ何レモ古墳ナルモ破壊シアリ石棺財ハ易行寺ニ使用アル様申サル

昭和8年5月11日 五月十一日ヨリ本縣史蹟調査員柏倉亮吉氏調査滞在従事セラレ甲冑刀剣埴輪筒破片発見セラレ墳土地域測量セラレタリ其後史蹟ノ出願ヲナシ九月七日縣知事ヨリ認可セラレタリ

以上の記述内容からは、柏倉氏の報告文のみでは知り得ない事実がいくつか判明する。供養塚古墳「発掘の事情」として補記しておこう。

短甲と刀剣類の発掘日

まず、短甲と刀剣類の発掘日について、柏倉氏の報告では昭和8年2月上旬とされているが、これが昭和8年2月14日であったことがわかる。

中川泉三氏への出土品の鑑定・研究の依頼

また、発掘後の動向として、発掘から約一月後の同年3月18日に短甲と刀剣類の鑑定及び当字古来の歴史を鮮明にするため坂田郡の中川泉三氏宅を訪問すべく、水谷・小川両氏を派遣したという。これについては、中川氏が彙報のなかで、「三月十八日舊知馬淵村前村長水谷國松前助役小川萬助の両氏は此等の出土品を携帯して遠く伊吹山下に筆者を訪ねられた。」と述べていることと符合する（中川1938）。中川氏による調査概要文はこれをうけてまとめられたのであろう。

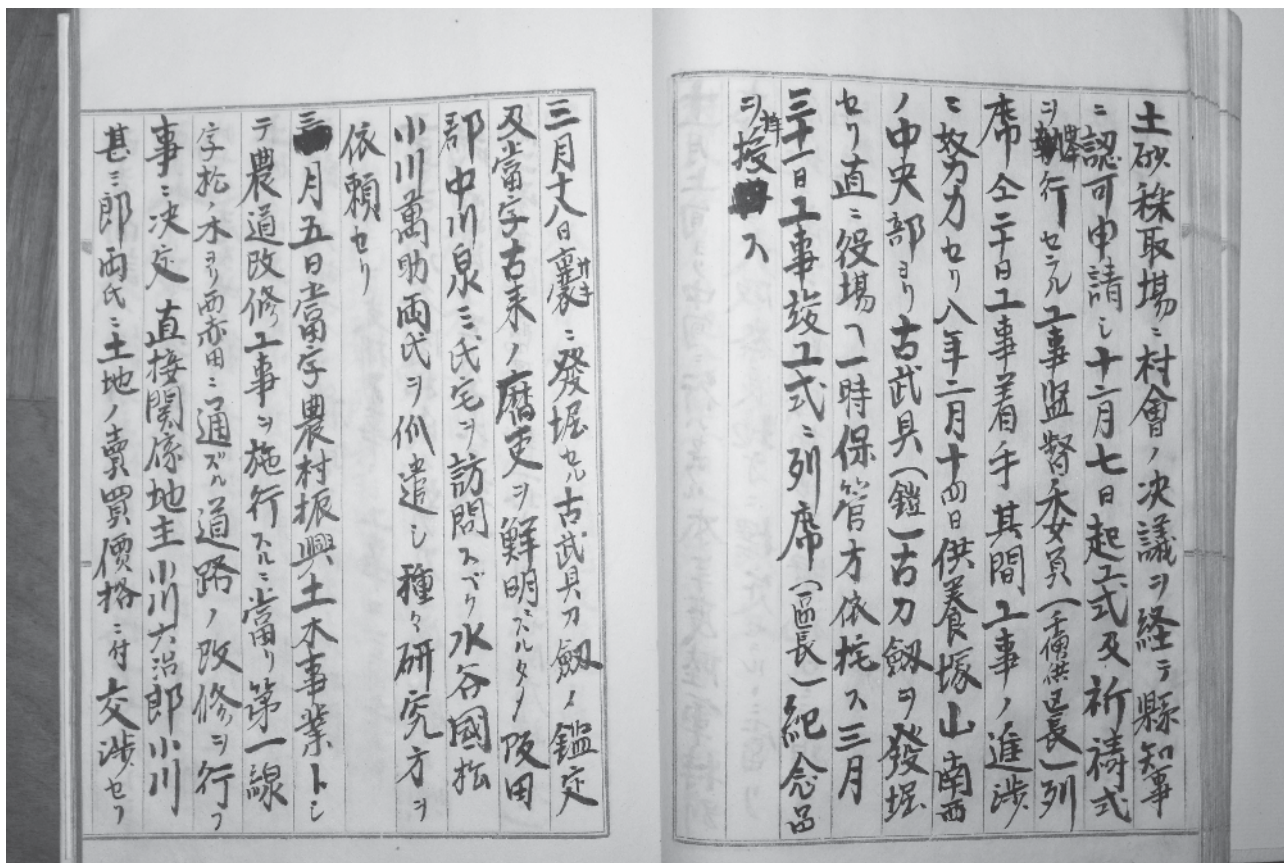


写真1 『年代記』



写真2 易行寺境内の石

中川泉三氏の現地視察

さらに、その約一月後の4月22日には中川氏が供養塚古墳を岩塚古墳、トギス塚古墳などと合わせて現地視察し、「石棺財ハ易行寺ニ使用アル様申サ」れたとある。

中川氏が現地を訪れたことは、彙報の記述からも窺える。

ただし、氏は水谷・小川両氏の訪問の「翌日」に現地を訪れたとしているが、『年代記』ではそうした事実は確認できない。『年代記』の記述内容からすれば、「翌日」は「翌月」の誤植である可能性も考えられよう。

柏倉亮吉氏の現地調査

5月11日には、柏倉氏が調査のために現地に滞在し、供養塚古墳の測量を実施、その後史跡の出願をして9月7日に県知事から認可されたことがわかる。

柏倉氏による現地調査に関して注意しておきたいのは、残存する墳丘上に残された蓋石を写した『滋賀県史蹟調査報告』の図版第五（2）に積雪が確認できることである。これに対し、古墳の全景を写した図版第五（1）では、積雪は確認できず、写真に写る人物の服装も5月の状況として違和感がない。図版第五（2）には写真の撮影者や提供者の記載がないことから柏倉氏が撮影したものと思われるが、当地では、5月11日に積雪がある状況は考え難く、この2枚の写真は異なる日に撮影された可能性が高い。

なお、柏倉氏が同書において報告した大字千僧供の曼荼羅堂跡と冷泉寺を写した図版第九には、積雪が確認できる。柏倉氏は、『年代記』にある5月11日とは別の日にも供養塚古墳を訪れていた可能性があり、おそらく、それは曼荼羅堂跡と冷泉寺の調査時であったと思われる。

3. 易行寺に運ばれたと伝わる蓋石をめぐって

ところで、柏倉氏は報文中において、寛文年間の発掘の際に出土した石室の蓋石が易行寺に運ばれたと伝わることを述べている。氏はそのうえで、「易行寺に運ばれたといふものは、易行寺境内現存のもの何れであるか不明であるが、何れとしても蓋石として使用するに適する」との所見を述べている。中川氏が現地視察の際に、いずれの古墳のものを指しているのか特定できないが、「石棺財ハ易行寺ニ使用アル様申サ」れたのも、易行寺に石材が運ばれたという伝承があったため、氏が易行寺において、これを確認し、地元住民に教示した可能性があるだろう。

なお、これに関して、易行寺の赤松正之住職に事実関係を確認したところ、興味深い情報が得られた。

住職によると、自身の母親から聞いた話として、かつて境内の石を調べにきた人物がいたとのことである。昭和10年生まれに住職自身は記憶にないとのことであるから、これは住職の幼少期以前の出来事であった可能性が高い。

その人物が調べにきたという石は、現在、沓脱石として使用されているものである（写真2）。平面形が長方形に近い扁平な石で、長さ170cm、幅72cm、厚さ24cmを測る。今

となっては推測の域を出ないが、当時地元でこの石が供養塚古墳の蓋石として伝わっていた可能性も考えられる。

住職の母親がいう境内の石を調べにきた人物が中川氏なのか柏倉氏なのか、はたまた別人なのか明らかでないが、仮に中川氏や柏倉氏であったならば、それは『年代記』に記されたように昭和8年4月～5月のことであったと考えられる。これもまた昭和7年度の発掘に関する貴重な情報であり、ここに補記しておく。

4. おわりに

本稿では、これまでほとんど注目されることのなかった「埋もれた」史料に光を当てることで、供養塚古墳の発掘史をより情報豊かに叙述することができた。

擱筆にあたり、触れておきたいのが当古墳の呼称である。柏倉氏は報文中において、当古墳が「俗に供養塚、または黒山塚と称せられてゐた」と述べ、中川氏は彙報で「今人は黒塚と呼んでゐる」と述べている。また、『年代記』には「供養塚山」や「供養塚古墳」の記述がある。

しかし、千僧供町出身の筆者の感覚では、今日、供養塚古墳を「黒山塚」や「黒塚」と呼ぶ人はほとんどおらず、地元では「くろすけ山」と呼ばれることが多いように思う。古墳の呼称の移り変わりもまた、歴史事象として看過できない。

【謝辞】

本稿の作成にあたっては、以下の方々のお世話になった。末筆ながら、御芳名を記し、感謝申し上げる次第である。

赤松正之 坂田茂弘 馬場喜久男 馬場茂喜 松本繁 宮村晃弘

写真典拠

写真1・2 宮村撮影

文献

柏倉亮吉1934「供養塚古墳」『滋賀県史蹟調査報告』第6冊

斎藤忠2006『日本考古学人物事典』学生社

辻川哲朗2002「千僧供古墳群」『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う

出土文化財管理業務報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

中川泉三1938「近江千僧供の古墳出土品」『考古学雑誌』第28巻第1号 日本考古学会

中川泉三没後70年記念展実行委員会2009『史学は死学にあらず』サライズ出版

（みやむら せいじ：調査課 主任技師）

平成31年（2019）3月31日

紀 要 第 32 号

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(TEL)077-548-9780 / (FAX)077-543-1525

e-mail : mail@shiga-bunkazai.jp

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：(株)同朋舎